

花みづき

第 37 号 / 2023.4.1

ボーダーレスと言われる時代の図書館

学術情報委員会 委員長
子ども学部 発達臨床学科准教授
廣澤 満之

学生時代の図書館のイメージは静穏と重厚である。当時、OPAC はあったと思うが、それよりも幅 10cm ほどの手書きされた書誌情報のカードの方が記憶にある。何万枚ものカードから情報を探るのである。大学院で教育学に進もうとした時、初めて「先行研究」という概念を学んだ。書籍や論文がどのようにお互いの知見を批判しているのかということを描くためには、自分の手で整理して図式化をしていく必要がある。翻ってみると、自分の手が届く範囲で調べ尽くすことが、ある意味容易だった時代のように思われる。

現在、書籍や論文のデータベースは多様な機能が付加されている。ある論文を検索すれば類似している研究なども出る。論文は限られた空間だけではなく、インターネット上のオープンスペースに置かれる時代となった。学生たちが持ってくる論文は、そのようなオープンにされたものにとどまらず、果たして論文なのかと思われるものが多い。つまり、学術情報自体の境界が非常にあいまいになっており、その情報を「精査」する能力こそが求められるようになってきている。私の学生時代は学術情報が明確であったと言えるだろう。

境界のあいまいさは、図書館というハードも例外ではない。近年、新たに建設されたある大学図書館を見てみると、グループ学習できるスペース、可動式の椅子、書き込みできる机！までそろっている。その横には、書棚と飲み物の自動販売機、つまり、飲食できるスペースもある。さらには、このスペースから連続性をもって授業や講習ができるスペース、多くの一人がけの椅子もある。現代の図書館は、場が整えられ、利用者が“何をするか”という意味を創り



出すのである。従来の図書館は大学が意味を決めていた。

戦前・戦中を代表する哲学者、三木清は『人生論ノート』の「秩序について」の節で以下のように述べている。「一見無秩序に見えるところに却って秩序が存在するのである。この場合秩序というものが、心の秩序に関係していることは明かである。どのような外的秩序も心の秩序に合致しない限り真の秩序ではない。」

情報の無秩序な波の中にある学生諸氏と外的秩序を重んじる図書館に対して、現代における役割を示唆する言葉ではないだろうか。心の秩序こそが真髓なのである。

昨年度、大学設置基準等の改正が行われ、「学修者本位の大学教育の実現」が示されている。その中で、「初等中等教育の大きな変化を受け止め」て高等教育が内部質保証を機能させることが求められている。学修者の実態に合わせて自己変革が求められている。図書館は電子化・IT化への対応を求められているが、私見では、学修者の学び方の変化に合わせて、それに寄与する情報探索の支援、学修者同士の学びを促進する環境（物的・人的）の整備が求められていると考えている。新たな図書館を目指す取り組みが学内で始まっている。その議論に期待したい。

▶廣澤先生おすすめ図書

- 『保育者の地平：私的体験から普遍に向けて』、津守真著、ミネルヴァ書房、1997年
- 『変光星：ある自閉症者の少女期の回想』、森口奈緒美著、飛鳥新社、1996年
- 『深い河（ディーブ・リバー）』、遠藤周作著、講談社、1993年

絵本から広がる豊かな音の世界

私の専門は音楽教育学です。保育の中の音楽というと、歌をうたったり、合奏をしたり、そのために保育者はピアノが弾けなければ…とドキドキしている方も多いかもかもしれません。しかし、子どもが生活や遊びの中でどのように音や音楽とかかわり、どのように表現しているのかをよく見ると、私たちは「保育における音楽」をもっと広い視野でとらえる必要があることに気づかされます。

子どもや学生のイメージや生活経験と音楽的な活動・表現をつなごうとする時、私はよく絵本にお世話になります。幸い、白梅学園大学・短期大学の図書館は全国でも有数の絵本の所蔵数を誇っており、授業でも大活躍です。例えば、かがくいひろしのベストセラー絵本『だるまさんが』（ブロンズ新社、2008年）。絵本を読むということは一見音楽表現とは関係ないことのように見えますが、絵本を読む時に私たちは「声」を使いますね。声は私たちの身体から出てくる、もっとも身近で、産声から始まる人生最初の表現の一つと言えるかもしれません。その声はやがて言葉になり、歌になる…声について広く考え、声の表現を楽しむ時に、「どてっ」と倒れるだるまさん、「ぶしゅ〜」と空気が抜けてしまうだるまさん、「びろ〜ん」と伸びるだるまさんは、その動きとイメージ、オノマトペから豊かな声の表現を引き出してくれます。

声の表現は「呼吸」と密接な関係があります。普段なかなか意識することのない呼吸と、呼吸することで声を発し、様々なコミュニケーションを行っていること、声は感情を伝える手段であることを実感できる絵本が、『すっすっはっはっ こ・きゅ・う』（長野麻子作・長野ヒデ子絵、童心社、2010年）です。この絵本は、音楽学者として呼吸や声を用いた現代音楽を研究してきた著者が、絵本作家・



各教員おすすめ図書・執筆図書は図書館に所蔵しています。ぜひご利用ください。



短期大学 保育科 准教授
長井 覚子

長野ヒデ子と共に制作したものです。現代音楽と聞くと難しそうなものを感じるかもしれませんが、実は人間の表現の根源や本質を追求した時代の音楽でもあり、そこには人生の始まりである乳幼児期の音楽表現の育ちをどのように支えるのかを考えるヒントがたくさんあります。

最後にご紹介したいのがわらべうた絵本の『どんぐりころちゃん』（正高もとこ作、鈴木出版、2016年）です。わらべうたには、歌の面白さ、動きの面白さ、遊びの面白さなど様々な魅力があり、保育・教育を学ぶ皆さんにも是非学んでほしい歌の一つです。♪どんぐりころちゃん あたまはとんがって おしりはぺっちゃんこ どんぐりはちくりしょ…皆さんも秋になったら、どんぐりたちをよく観察してみてください。「あたまはとんがって」「おしりはぺっちゃんこ」ですね！お散歩をしながら、子どもを抱っこしながら、ふとこの歌が自然に口ずさまれる、そんな存在になってくれたら嬉しいです。

▶長井先生おすすめ図書

- 『だるまさんが』、かがくいひろし作、ブロンズ新社、2008年
- 『すっすっはっはっ こ・きゅ・う』、長野麻子作、長野ヒデ子絵、童心社、2010年
- 『どんぐりころちゃん』、正高もとこ作・絵、鈴木出版、2016年
- 『声の世界を旅する』、増野亜子著、音楽之友社、2014年
- 『表現原論：幼児の「あrawし」と領域「表現」フィールドノートからの試論』、大場牧夫著、萌文書林、1996年

私の薦めるこの1冊

『新しい科学論：「事実」は理論をたおせるか』 村上陽一郎著

(講談社 1979年)

教員になってはじめての頃は、一時間一時間の授業をこなすことで精一杯だった。そのため、大学で学んできたことが生かせず、ただ内容を教えることしかできなかった。そのような時間が続く中、キャリアを重ねていくうちに、再び、大学や大学院で学ぶ機会を得る。そのとき、この本に出会う。公立学校の教員になって15年ぐらいたったころである。本書は、理科教育が取り扱う自然科学とはそもそも何なのかを考えるきっかけを与えてくれた。科学という行為の一面を再認識することで、教科の本質を踏まえた授業を作り出していくことが少しずつできるようになってきた。理科を教えられる立場（生徒・学生）として、また、理科を教える立場（教師）として、科学を見直すことで科学や教科の存在意義を知ることが、双方の学びの好奇心を倍増させてくれる。

この本は、1979年に初版が発行され現在に至るまで出版され続けている。初版から40年以上たつが、タイトルにある新しいというキーワードは健在であり、日本人のもつ伝統的自然観を再認識させ、理科教育で取り扱っている異文化としての西洋科学について考えるには最適な入門書である。本書の前半は、私たちが広く常識的に信じられてきた科学観を整理している。それは、事実から理論が帰納される見方である。その見方は多くの人にとって、今まで学んできた理科での考え方と一致するものと思われる。

一方、後半は、前半で紹介した帰納的な考え方を否定し、理論が事実を創り出すような新しい科学観についての理論を展開している。科学という行為は、宇宙の中に潜んでいる絶対真理を求めているのではなく、その時代や文化で共



子ども学部 子ども学科 教授
中林 俊明

有や合意のできる動的な事実を作り出しているという主張である。

現代社会では、科学はなくてはならないものとなっている。身近な例として、日々手放すことのできないスマートフォンの中にはぎっしりと科学を基にした技術が詰まっている。したがって、科学にさほど関心はない人にとっても、科学が空気や水のようになくてはならない存在であり、科学に関わり続けていかなければならないことを知る必要がある。また、科学がとりわけ技術と手を結んだときに起こってくる自然と人間に対する悪影響も自覚すべきだろう。

筆者が主張している、このような時期に当たって自然科学を一般的に考え論じるための基本的視座そのものにもあらためて検討の光を当ててみる必要性について考えさせられる一冊である。



図書館ホームページの「利用状況照会」で借りている本の確認と延長・予約ができます。

▶中林先生おすすめ図書

- 『新しい科学論：「事実」は理論をたおせるか』 村上陽一郎著，講談社，1979年
- 『人類と気候の10万年史：過去に何が起きたのか、これから何が起こるのか』 中川毅著，講談社，2017年
- 『川はどうしてできるのか：地形のミステリーツアーへようこそ』 藤岡換太郎著，講談社，2014年

研究拠点としての図書館

2008年4月の花みづき第22号に「図書館—歴史を紡ぐ」という寄稿をさせていただきました。それから14年余りの時を経て、再び寄稿させていただきます。

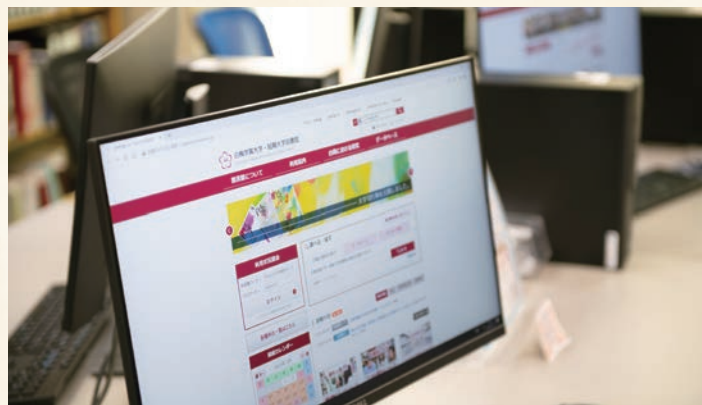
図書は、先人達の知恵であり、「知識はすなわち過去である」と書いた記憶がございます。

今回は、「知恵はすなわち未来である」と加えましょう。

大学における図書館の利用は、各自の多様なスタイルがあると思いますが、大学という研究機関において、図書館に勝る先人達の知恵を収集する場はないでしょう。もちろん、デジタル化が著しい昨今、オンラインでの文献収集も可能です。しかし、司書さんの力を借りて、論文本文を入手することや、相談に乗っていただけることは研究者にとっての逞しい助っ人です。

そうして新たな知見を生み出す研究がなされて、未来に貢献できることが研究者の最も重要な責務でしょう。そこで今回は「知恵はすなわち未来である」と加えます。図書館はこの研究の拠点として重要な役割を担っていると言えます。学生の皆さんも、卒業研究、修士論文、博士論文執筆にあたり、大いに図書館の支援を受けて取り組むこととなります。世界中に散在する様々な書籍や論文収集には、膨大なデータベースが存在します。そうしたデータベースの活用方法なども図書館の皆さんの力を借りて学ぶことができます。

ゆっくりと好きな文学や紀行記を読みふけるには、研究に没頭する日々の中、心のゆとり、余裕が必要です。そのような時間を生み出すにも図書館での様々な書籍が活用できます。



各自のスマートフォンからでも蔵書検索等可能です。



子ども学部 家族・地域支援学科 教授
土川 洋子

大学における図書館のこのような活用は既知の事柄である一蹴されるかもしれませんが、今一度、立ち止まり、研究拠点としての図書館の活用とは、自身の情報収集の場であるとともに、心のゆとりを図る場であることを再認識していただくと幸いです。

▶土川先生おすすめ図書

- 『救急精神病棟』, 野村進著, 新潮社, 2010年
- 『ビューティフル・マインド:天才数学者の絶望と奇跡』, シルヴィア・ナサー著;塩川優訳, 新潮文庫, 2013年

図書(絵本) 貸出ランキング

(2022/01/01~2022/12/31)



順位	回数	書名,巻次,叢書名
1位	22回	施設で育った子どもたちの語り
2位	21回	育ちつづける人達 障害の現実と普通の生活のはざままで
3位	20回	たんぼぼのうたがきこえる
4位	18回	跳びはねる思考 会話のできない自閉症の僕が考えていること
5位	15回	このまちで生きる 障害のある仲間たちの現在(いま)を未来に向けて紡ぎ続けたあさ作業所30年のあゆみ
6位	13回	いいんだよ、そのまま
7位	12回	子どもの貧困II 解決策を考える
8位	11回	そらまめくんのベッド こどものとも傑作集
8位	11回	おばけのてんぷら
8位	11回	発達障害のある子があなたにわかってほしいホントの気持ち 幼児期の子どもの「困った行動」にとまどわないヒント
8位	11回	母と子のきずな パート2 母子生活支援施設は家族を支援します
8位	11回	子どもが語る施設の暮らし 2

本好きな娘との日々を振り返って

私の娘は保育園から小学生の頃まで、とにかく本が好きでした。小学校に入学しての最大の楽しみは図書室に行くことでしたし、休み時間は図書室で過ごし、お厚い本をよく借りて帰ってきました。図書室にある本をすべて読んでみたいと意気込んでいたときもあります。ナルニア国物語、はてしない物語、ガフールの勇者たち、ダレン・シャン、ドラゴンラージャといったファンタジーが大好きでした。

本好きな娘を持つと、ご両親が本好きなのですか？とかお母さんが毎日読み聞かせをしていたのですか？と尋ねられるのですが、我が家はそれに当てはまりません。両親の仕事柄、子どもの前で新聞や論文を読んでいる姿は日常的にあったと思いますが、両親が本好きかという、それは全く違って、父はほとんど本を読まず、母である私も本を読むのは通勤中くらいでしたので、家では読んでいなかったと思います。読み聞かせについても、もちろんしてはいましたが、読んでいるうちに親の方が眠くなってしまったという記憶の方が残っています。娘は文字を覚えるのが早く、あっという間に一人で読めるようになり、読み聞かせよりも、一人で静かに本を読む時間が増えました。

子どもが一人で本を読めるようになってからも、子どもと本の話をするのは好きでした。読み聞かせた時間よりも、子どもが読んでいる本について、子どもから教えてもらった時間の方が長かったかもしれません。ガフールが大好きだったときは、夏休みの自由研究でフクロウ事典を作り、フクロウを自宅で飼う方法を一緒に調べたりしました（餌のことを考えて諦めました）。私は、子どもがどのようなことを面白いと思っているのかを教えてもらうことが楽し



最新おすすめDVDも視聴できます。



子ども学部 発達臨床学科 教授
佐久間 路子

かったのだと思います。子どもの中に知的好奇心が芽生えて、それがあふれ出ている姿に接するのが、子育ての喜びだと感じていました。この喜びは、私の専門分野である発達心理学の研究にもつながっており、子どもが考えていること、思っていることを知りたいという思いが、発達心理学に関心を持ち、研究を続けている原動力にもなっています。

娘は大きくなって本を読み続けるのかと思っていたのですが、中学に入学後、新たな友だちと出会い、お笑い、映画、音楽などに趣味が広がってからは、本はたまに読む程度になってしまいました。それでも本を読むことで培った語彙力、様々なことに関心を持ち、知識を深めていく経験が、現在大学生になった娘にとって大きな力になっていると感じます。発達心理学を教える母としても、幼い時期に本に触れる経験、本の魅力に気づき関心を広げていく体験の大切さを実感しています。

▶佐久間先生おすすめ図書

- 『ガフールの勇者たち』全15巻、キャスリン・ラスキー著；食野雅子訳、メディアファクトリー、2006年、
- 『やわらかな遺伝子』、マット・リドレー著；中村桂子、齊藤隆央訳、紀伊国屋書店、2004年
- 『「弱いロボット」の思考：わたし・身体・コミュニケーション』、岡田美智男著、講談社、2017年
- 『アイネクライネナハトムジーク』、伊坂幸太郎著、幻冬舎、2014年

図書館から感じる校風

皆さんは、本学の図書館から、どのような校風を感じるでしょうか。

私は、学部・修士・博士と、すべて異なる大学に在籍しました。そのため、それぞれの大学によって、図書館の雰囲気や校風が異なり、それぞれの校風があらわれると感じました。

学部時代の大学図書館は、館内の通路が広く、拡大読書器も目立つ場所に設置されていました。そのため、障害を有する学生にとっても利用しやすい環境にあったと思います。また、閲覧室が広く、大きな机が多数ありました。そのため、卒業論文の提出や国家試験が近づく頃には、図書館に学生が集まって切磋琢磨していたことを覚えています。学部時代の大学図書館では、様々な学生が「福祉」を共通言語に同じ方向を向いて進んでいくという校風があらわれていたように思います。

修士時代の大学図書館は、広大な敷地に専門分野ごとの図書館が設けられていました。そのため、必要な文献資料は、1日をかけてそれぞれの図書館を回りながら収集するということもありました。それぞれの図書館には、個性があります、私はいつも、中央図書館を利用していました。しかし、医学系の図書館に行くと、白衣姿の学生が洋書を片手に調べ物をしており、自分も医学生のような気分になります。また、体育・芸術系の図書館に行くと、ジャージ姿の学生がソファに寝転んでスポーツ雑誌を読んでおり、張り詰めていた気が少し和らぎます。修士時代の大学図書館では、どの図書館も非常に充実した蔵書で、各専門分野の奥深さを感じ、先端の研究成果が生み出されていく校風があらわれていたように思います。

博士時代の大学図書館は、私が必要とする文献資料を、おおむね本館で入手できました。ただし、本館で“書庫”



白梅学園大学大学院 子ども学研究科
子ども学部 准教授
橋本 陽介

に入って文献資料を直接閲覧できるのは、原則として教職員と大学院生に限られていました。そのため、図書館の入口に加え、書庫の入口でも学生証をかざす必要があり、書庫での文献資料探しに特別感がありました。博士時代の大学図書館では、図書館での文献資料探しを通じて研究者を志すという意識を高め、世の中で活躍する数多くの研究者が巣立っていくという校風があらわれていたように思います。

本学の図書館は、数多くの絵本と、保育や教育、心理、福祉といった「子ども学」にかかわる文献資料が、非常に充実しているという印象があります。私たちが学び、研究を進めている「子ども学」は、様々な学問分野が集合して成り立っているといえます。これは、「子ども」を理解していくうえで、多面的な視点が必要であることを意味しているのではないのでしょうか。図書館の文献資料を最大限に活用しながら、教職員と学生が「子ども」について様々な視点から考え議論する、そのような社会が羨む校風をみんなで発信していきたいですね。

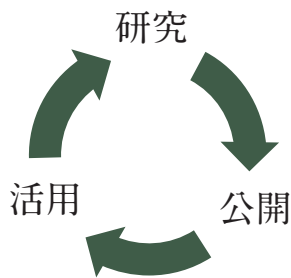
▶橋本先生おすすめ図書

- 『野生児の記録7 新訳アヴェロンの野生児』, J.M.G. イタール著;中野 善達,松田清訳, 福村出版, 1978年
- 『新版 日本語の作文技術』, 本多勝一著, 朝日文庫, 2015年
- 『障害者排除の論理を超えて: 津久井やまゆり園殺傷事件の深層を探る』, 阿部芳久著, 批評社, 2019年

■ 主なデータベース ■ (一部学外アクセス可)

- < 日本語論文 > CiNii Research、医学中央雑誌 医中誌 Web、医学文献検索 メディカルオンライン、日経 BP 記事検索サービス
- < 外国語論文 > PsycINFO、PsycARTICLES、Academic Search Elite、Child Development&Adolescent Studies
- < 新聞 > 朝日新聞クロスサーチ、読売新聞 ヨミダス歴史館、毎日新聞 毎索
- < 百科事典 > ジャパンナレッジ、ブリタニカオンライン、Grove Music Online

図書館ホームページの「データベース」より、オンラインで利用できます。



(図書館×子ども学研究所共同)

古田足日 研究

新資料の発見

文献調査チーム

調査の新たなステージへ向けて

コロナ禍に始動した本プロジェクトの調査研究も3年を経過し、古田足日氏の蔵書、約33,000冊のうち、絵本や児童書を除いた研究に資する本（古田氏が著作の際に参考にしたであろうさまざまな研究書等）のデータ入力作業が佳境を迎えつつある。約1年前の2022年の年始あたりから、新しい研究上の協力者をお迎えし、現在、子ども学研究所の客員研究員としてデータ入力を精力的に行っていたいでいる。そのほか、当初よりともに研究を進めてきた外部の研究者の先生方にも継続してデータ入力作業に携わっていただいております、現在までのところ、膨大な蔵書の山の6～7割の入力作業を終えつつある。

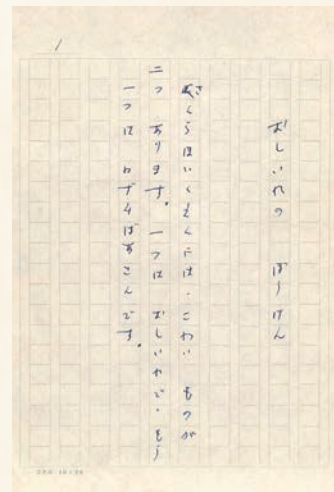
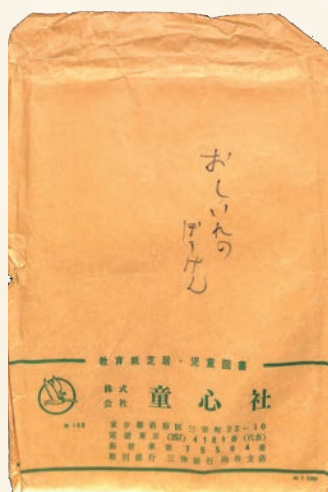
こうしたデータ入力作業にとどまらず、毎年、学内にあるいくつかの研究雑誌への論文掲載も続いており、かつ外部の研究者の先生方による児童文学学会等での研究発表や論文執筆等も合わせると、古田氏の著作や仕事をあぶり出し検証する古田研究というもの、これまでになく蓄積されてきたと言えるだろう。

このような研究プロジェクトの進行において、2022年は大きな収穫があった。調査の過程において、古田氏の



学内プロジェクトメンバー

高田文子学長、仲本美央教授、鬼頭七美准教授、井原哲人准教授、子ども学研究所武田和彦、図書館佐藤誠



『ぼくらは機関車太陽号』『おいしいのぼうけん』などの原稿が新たに見つかったのである。自筆原稿は作家の創作過程に関するさまざまな情報の宝庫である。多くの作家研究、作品研究において、原稿の調査によって未知の情報が明らかとなり、研究上における大きな進展がみられるということは、しばしば起こることである。とりわけ、一つの作品に関してバージョンの異なる複数の原稿が見つければ、作家が改稿を重ねながら本文を定めていった過程が明らかとなることはもちろん、場合によっては、作家と編集者との間でどのようなやりとりがなされ、その結果として本文にどのような変容が生じていったのか、ということが浮かび上がる場合もある。最終稿に至るまでのあいだに、作家の中でどのような思考がなされたのか、原稿という資料が研究にもたらす可能性はとても大きいものがある。このたびの原稿発見が、古田氏の仕事の総体を捉え返す一つのきっかけになることは間違いない。

2023年は、県立神奈川近代文学館において本プロジェクトとの共催による古田足日に関するシンポジウムを開催する予定である。これまでの研究の蓄積および新たな原稿の調査結果等を盛り込みながらのシンポジウムになれば幸いである。

子ども学部 子ども学科 准教授 鬼頭 七美

プロジェクト 2022-2023

調査の進展を踏まえて



インタビューチーム

インタビュー日時	インタビューー
2020年2月2日(日) 14:00~	今関信子氏、一色悦子氏、山口節子氏、池田陽一氏 (古田塾で親交が深かった方々)
2020年2月11日(火) 10:00~	古田文恵氏 (古田足日氏ご令室) 酒井京子氏 (童心社会長)
2021年10月6日(水) 18:00~	汐見稔幸氏 (白梅学園大学名誉学長)
2021年11月28日(日) 15:00~	藤田のぼる氏 (児童文学評論家、作家)
2021年12月15日(水) 20:00~	鈴木孝子氏 (一般財団法人文民教育協会子どもの文化研究所事務局長)
2022年4月26日(火) 16:30~	川北亮司氏 (作家) 増山均氏 (早稲田大学名誉教授)
2022年7月30日(土) 14:00~	山田富秋氏 (松山大学教授)
2022年7月31日(日) 10:30~	大西フジ子氏 (古田足日氏と交友の深かった方)
2022年10月9日(日) 13:00~	鈴木実氏 花鳥賊康繁氏 (児童文学作家、山形童話の会)
2022年12月7日(水) 10:30~	代田知子氏 (埼玉県三芳町立図書館長)

新たな子どもの文化に関する研究の 拠点を目指すために

本プロジェクトにおいて計画をしていた古田氏との縁の深い関係者に対するインタビューは、2020年2月から2022年12月の約3年弱の調査期間を経て無事に終了した。その研究協力者の延べ人数は16名。1~2時間という長時間にわたる調査に多大なるご協力をいただいた。調査では各人が触れ合いを重ねてきた過去の豊かな体験を懐かしみつつも、誰もが、当時の古田足日が沈黙考しながら、目の前にある物事や出来事に真摯に向き合われる姿を語っていたことが印象的であった。今後は、これら映像資料を貴重な社会資源としてアーカイブ化するだけでなく、この映像資料と現在進行中の文献調査の資料を重ね合わせながら、古田氏の多様な側面を明らかにする研究へとアプローチしていく予定である。

子ども学部 子ども学科 教授 仲本 美央



確実に前へ

図書館チーム

学生と共に

児童文学者・児童文学評論家の古田足日氏の蔵書約33,000冊が白梅学園に寄贈されてから早や3年が過ぎようとしている。研究プロジェクトがインタビューチームと文献調査チームに分かれ、早々に始動した。図書館(受入)チームも全体像の把握に努めつつ、毎年学生の力も借りながら、閲覧に供する環境整備に向けて鋭意作業中である。

2020年大学・短期大学重点施策として、スタートを切ったかと思えば、コロナで計画通りには行かず、学内を見れば、コロナ禍でアルバイトの減少により困窮する学生が多数増えたこともあり、経済的影響を鑑み、白梅として、学生のアルバイト減収の一部でも補助的役割を担いたいという想いで、外部委託を急遽取りやめ、学生による作業に切り替えて施策を進めることとした。初年度(2020年)は、15名の学生が参加、2年目(2021年)は34名の学生が参加、そして3年目(2022年)は20名の学生が参加してくれた。特に初年度から2年目については、図書館アルバイト終了後、学内フードパントリーより食料や物資をもらって帰れる流れを確立し、収入面以外の部分でも学生支援を心掛けた。



古田家にあった約33,000冊のうち、主に1階の書庫にあった児童書を中心に図書館チームでは受入作業を進めている。1階の所蔵数は約23,240冊と仮定し、受け入れ作業を始めたが、古田氏の付箋、書き込み等



2014年6月に亡くなった
ふるた たるひ
古田 足日氏について

1927年愛媛県生まれ。
早稲田大学露文科中退。児童文学作家・評論家。

主な作品

『おしいれのぼうけん』、『ダンブえんちょう やっつけた』(いずれも童心社)、『ロボット・カミイ』(福音館書店)、『大きい1年生と小さな2年生』(偕成社)、『モグラ原っぱのなかまたち』(あかね書房)、『新版宿題ひきうけ株式会社』、評論『児童文学の旗』(いずれも理論社)、評論『現代児童文学を問い続けて』(くろしお出版)など多数



が有った貴重な研究対象本も9,017冊見つかり、文献調査チームに追加提供した。仕分け作業には2年かかったが、1冊1冊学生が丁寧に仕分けしてくれたおかげで、貴重な資料を見逃すことなく保管できるのは大きな成果である。

第一段階の仕分け作業が終了し、図書館で登録する冊数は、14,223冊であることが判明した。この冊数は、図書館の通常業務5年分の受け入れ冊数と同じである。第二段階として、リスト化・入力作業に移行している現在、約8割11,995冊の入力が終了している。2023年は引き続きリスト化・入力作業に励むとともに第三段階として、いよいよ貸出に向けた準備に取りかかる。また、第四段階として、さらに研究対象本の約18,777冊の登録作業もその後に予定している。

2023年以降、重点施策から通常業務に組み込み、さらに丁寧にスピーディーに作業を進めていくことになるが、身の丈に余るほどの日本児童文学を中心とした知的財産の数である。「子どもについて関心をもって勉強している学生さんたちに使ってもらいたい」とあっさり託してくださったご令室文恵氏の篤志に一日でも早く応えるべく、日々学生と共に古田氏の思い出にふけながら・感謝しながら作業を進めている。

図書館 佐藤 誠

図書館アルバイトを通して多種多様な本に出逢いました。

古田足日さんの寄贈資料整理作業に携わる中で、寄贈された本の種類・数に驚きました。児童書や絵本だけではなく様々な資料があり、手紙なども残されていて、古田足日さんを通じて多くの人が繋がっていたこともわかりました。資料の中には、劣化が進んでいるものもありましたが、それでもこうして現代に受け継がれてきたという事実に感動しました。在学中、図書館では授業や実習、ゼミナール活動で使用する資料を多く借りました。特にゼミナール研究発表会で、とても役立ちました。その他に、



短期大学 保育科 2023年3月卒業
進路決定先：東京都私立保育園

実習での指導案作成やあそびのアイデアなども、主に図書館の資料を参考にしました。また、図書館は、“課題が終わらない”“試験に向けて勉強したい”という時にもおすすめです。

図書館アルバイトを通して、日本の児童書や絵本だけでなく、海外の作品にも幅広く触れることができました。私が生まれる前の作品も多くあり、見ていてとてもワクワクしました。古田足日さんの「ロボット・カミイ」を手にとると、子ども同士のぶつかり合いの経験を通して、ともに助け合い・支えあって成長する、とても大切な力が培われる様子が描かれていて、私は、これが「子どもである」と思わせる元気で個性が強いカミイの話がとても魅力的であると感じました。アルバイトをきっかけに、



子ども学部 子ども学科 2年

より深く本に興味を持ち、図書館の利用が増えました。

また、このアルバイトを通して先輩や他学科の学生との関わりを持てたことは、とても貴重な体験となりました。

図書館おすすめスポット

■図書館入口の新着図書コーナー（1階）

新着図書のスペースを拡張しました。

図書館で新しく購入した図書は、ここに展示しています。

週ごとに入れ替えを行っています。

新着絵本、特別展示の資料もこのコーナーで紹介しています。ぜひ手にとってご覧ください。貸出も可能です。



■過去問題集・テキストコーナー（1階）

1階には過去問題集コーナーがあります。ここでは公務員の採用試験や資格取得試験などの問題集を過去数年分から最新のものまで、数多く取りそろえています。先輩たちはここから手に取り試験対策の勉強に励んでいます。

授業や資格取得のための勉強に各コーナーをぜひご利用ください。



■教科書、学年別絵本、教員養成推薦書コーナー（1階）

図書館の1階階段横にコーナーがあります。各学校で採択している国語・算数・理科・社会・道徳等の教科書と、各教科の指導要領が並んでいます。

また、先生方が推薦した小学校教諭になるために読んでおきたい本も隣にあります。貸出(1週間)もできますので、小学校教諭を目指す方はぜひこのコーナーに足をはこんでください。

